

〔資料〕

「ラオス」から何を読み解くか

飯 島 滋 明

名古屋学院大学経済学部

What Should We Learn from LAOS ?

Shigeaki IIJIMA

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

発行日 2016年3月31日



写真1 ラオスの首都、ビエンチャンから見るメコン川。対岸はタイ。2016年1月，飯島撮影。

【1】いいわけ

この原稿は、小松照幸先生の退官記念論集への掲載が予定されている。当初、といっても1年以上前だが、小松先生の退官記念論集への掲載の話を聞いた際、ASEAN（東南アジア諸国連合）の成立経緯と推移についての論文を執筆しようとした。小松先生にはいろいろお世話になったが、小松先生とのかかわりが深かったのは、とりわけ小松先生がご尽力されてきた、タイのコンケン大学への短期留学の企画であった。2008年のタイの短期留学の引率のお誘いを受け、その後、7回ほどタイの短期留学の引率をすることになった。こうした縁から、私は小松先生の退官記念論集に際しては、タイにかかわる原稿の掲載を考え、ASEANの原稿を執筆しようと思っていた。東南アジアは1960年代以降も武力紛争の絶えない地域であったが、いまや「平和共同体」として、EUにつぐ「成功例」とみなされている¹⁾。いま、私は国連の人権理事会で審議されている、「平

1) ASEANの概説については、前田哲男・飯島滋明編『Q&A 日本軍事学入門』（吉川弘文館、2014年）での私のASEAN紹介を参照。

和への権利 (Right to Peace)」の問題にもかかわっているが²⁾、「積極的平和主義」「国際平和協力」などと言いながら「平和への権利」の採択に反対している日本政府と違い、ASEAN諸国は2015年4月にも、スイス・ジュネーブにある国連の人権理事会で「平和への権利」の採択に向けて全力を尽くしているのを目の当たりにした。繰り返しになるが、私はASEANについての原稿を執筆するつもりでいた。しかし、いわゆる「安保法制」、多くの国民からは「戦争法」と批判される法律を安倍自公政権が国民世論の反対を押し切って成立させようとする政治姿勢をとることにより³⁾、憲法研究者として発言、講演する機会が多くなった。東京、名古屋、岐阜、三重などでの講演の回数は正直、覚えていないが、北海道や大阪では4回、そのほかにも岡山、島根、神戸、徳島、埼玉などでも憲法学者の社会的責務として、講演等の機会に発言する機会をいただいた。授業や原稿（去年で20本を越えている）、年間50近い講演などをしながらASEANという、巨大な問題を俎上に載せて十分な議論をすることは私の能力の限界を大幅に超えていた。そこで小松先生が在学中に尽力されてきたタイの問題ということで、次にカンチャナブリにある、泰緬鉄道についての原稿を執筆しようと考えた。東京の靖国神社の「遊就館」にも泰緬鉄道にかかわる展示物が掲載されているように、泰緬鉄道の問題もアジア・太平洋戦争の際の日本の戦争遂行の歴史では忘れられてはならない事柄である。実際にタイの短期留学の際にも泰緬鉄道には学生を連れて何度か行っている。カンチャナブリにある「死の鉄道博物館・調査センター」の入口には、パネルが掲示されていて（【写真2】）、「日本はこんなところまで攻撃したんだ」と言っていた学生の発言を思い出す。

しかし、泰緬鉄道についても、やはり現地をもっと調査したうえで書くべきと考えるようになった。「ASEAN」や「泰緬鉄道」の問題は、小松先生に対する不出来な私の今後の宿題とさせて頂くことにして、ここで執筆しようと考えたのがラオスの原稿である。タイの短期留学の際、隣国との関係を学生に実体験してもらおうという観点から、タイのコンケン大学から、ラオスにも何度も行った。四方を海で囲まれた日本と違い、メコン川を越えればタイという国からラオスという国になるという経験も、学生にとっては得難い経験のように思われた。そこでラオスについての原稿を書くことにした。

なお、ASEANや泰緬鉄道については書けないからラオスについて書いたなどと言うと、ラオスについては自信のある原稿を書くつもりと思われるかもしれない。しかし、実はやはり心もとない原稿になっている。ただ、ラオスについてはあまりに多くのことが知られていないと考えたため、拙い内容であり、小松先生に申し訳ないと思いつつも執筆したのが本稿であることも言い訳をさせて頂く。

2) 「平和への権利」については、平和への権利国際キャンペーン・日本実行委員会『いまこそ知りたい平和への権利 48のQ & A戦争のない世界・人間の安全保障を実現するために/平和への権利』(合同出版、2014年)、飯島滋明『『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 第50巻 第2号』111-121頁参照。

3) 安保法制についての私のコメントとして、例えば『週刊女性』2014年9月2日号、2015年6月30日号、2015年8月11日付参照。

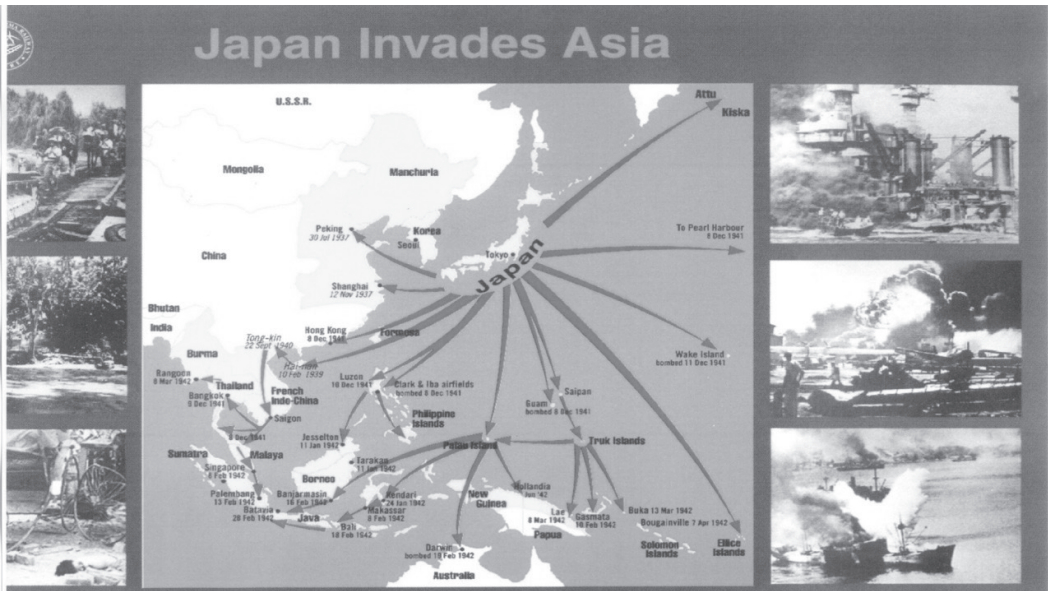


写真2 「戦場にかける橋」の舞台となった、カンチャナブリ（タイ）にある、「死の鉄道博物館・調査センター」に掲示されているパネル。2015年2月、飯島撮影。

【2】ラオスにいったい何があるというんですか？

この題、小説が好きな人にはピンとくる題かもしれない。そう、村上春樹氏の紀行文集である『ラオスにいったい何があるというんですか？』（文藝春秋社、2015年11月刊行）の真似である。村上春樹氏が指摘するように、ラオスについてどの程度、普通の日本人は知っているだろうか？

村上春樹氏の本から引用すれば、「それが地図のどのあたりにあるのか、それすらろくに知らなかった。あなたもおそらく同じようなものではないかと、僕は（かなり勝手に）推察してしまうのだけれども」（村上氏同書151頁）というのが多くの日本人の実情かもしれない。しかし、「日本人にはあまり馴染みのないラオスですが、フランスをはじめとする欧州の人々にはメジャーな観光地です。首都ビエンチャンでも、川沿いのレストランには、昼間からのんびりとワイングラスを傾けている人々の姿を見ることができます⁴⁾」とのように、ラオスは例えばヨーロッパでは観光地としては人気がある。ラオスの人々はとても優しい。知らないラオス人に「サバイ・ディ」と挨拶しても、老若男女を問わず、笑顔で挨拶を返してくれる。隣国タイは「微笑みの国」と言われるように笑顔でも有名であるが、ラオスの人の笑顔もとても良い。「ラオスの生活ではストレスがたまらないので、ラオス人にはハゲている人がいない」とラオス人に言われたことがあるが、個人的な感想としても、ゆったり落ち着ける国である。ただ、ラオスという国には、壮絶な歴史があることも同時に知らなければならない。

4) 福森哲也/小原祥嵩『ミャンマー・カンボジア・ラオスのことがマンガで3時間でわかる本』（アスカ、2012年）174頁。

【3】ベトナム戦争について

「ベトナム戦争」というと、あまりピンとこない人も少なくないかもしれない。学生に聞いてもほとんどの学生は知らない。偉そうに言う私も、実はベトナム戦争が始まった時には生まれていない。ここでベトナム戦争について簡単に紹介しよう。

1945年9月2日、反日独立運動を指導していたホー・チ・ミンは日本からの独立を宣言した。ただ、その後、ふたたびフランス軍の侵略を受けた。ベトナムは8年間にわたりフランスと戦わざるを得ない状態に至った。しかし1954年5月、ディエンビエンフーでフランス軍が完敗、7月のジュネーブ協定により、第1次インドシナ戦争が終結した。ジュネーブ協定では、北緯17度に臨時の軍事境界線を設け、2年後には総選挙を行い、南北ベトナムを統一すると定められていた。ところが総選挙が行われればホー・チ・ミンが当選すること、ベトナムやインドシナが共産化すれば、タイやビルマなどにも共産主義国が成立する（いわゆる「ドミノ理論」）と考えたアメリカは、ジュネーブ協定とベトナム統一に否定的な態度を示した。そしてベトナムの南北統一を阻止するため、南ベトナムに傀儡政府を作り、ベトナムの南北統一を妨害した。その後、1964年8月の「トンキン湾事件」をでっち上げ、さらには1965年2月にブレイクとクイニョンの米軍宿舎が爆撃された事件を口実に、アメリカは北ベトナムに対する爆撃を行なった。1965年3月2日以降は爆撃が常態化する。「米軍の介入が本格化した65年から、71年3月までに米軍がインドシナ3国で使用した砲爆弾の総量は実に1178万トン。ヒロシマ型爆弾の589個分であった。……戦争末期のあの恐ろしかった対日空爆に使用された爆弾総量が、焼夷弾を含めてわずか15万トンでしかなかったことを思えば、そのすさまじさは容易に想定できるだろう」⁵⁾ とのように、ベトナム戦争でアメリカは壮絶な爆撃を行った。さらには、ソンミ村の虐殺に代表される米軍による住民虐殺など、結果としてベトナム戦争で300万人ものベトナム人が亡くなった。一方、アメリカでも、5万人もの死者が出て、ベトナム戦争の帰還兵300万人のうち、50万人から70万人がPTSDにかかり、15万人の自殺者、麻薬・アルコール依存症が50～75%、50万人が逮捕・投獄され、家庭でのDVなどが原因で離婚率が極めて高くなったなど、ベトナム戦争の後遺症はアメリカ社会をも苦しめることになった。

【4】ベトナム戦争とラオス

(1) ラオスへの爆撃

「ベトナム戦争」というと、ベトナムだけの戦争と思われるかもしれない。ただ、カンボジアとともに、ラオスもアメリカの政策に翻弄されて平和な生活を破壊された上、多大な犠牲をこうむった国であることも認識される必要がある。1954年のジュネーブ条約では、ラオスは中立であり、外国軍の駐留も認められないことになっていた。しかしアメリカのCIAはジュネーブ条約

5) 亀山旭『ベトナム戦争 ―サイゴン・ソウル・東京―』（岩波書店、1986年）88頁。

を無視し、秘密裏にラオス北部のローンチェンに軍事基地を設置した。ソ連、中国の支援を受けていた北ベトナムがホー・チ・ミンルートを利用して南下するのをアメリカは防ごうとしたが、「ホーチミン・ルートはその9割がラオス領に建設されていた」⁶⁾。これがラオスの悲劇をもたらす一因となった。ラオスへの爆撃については、首都ビエンチャンにある、クラスター爆弾と義足の資料館（COPE, Cooperative Ortheotic & Prosthetic Enterprise）の説明から紹介しよう。COPEの資料『SOUVENIR GUIDE』には、「ラオスに対する9年にわたるアメリカの爆撃は歴史上、最長のものである」「ラオスは地球上、一人当たりもっともはげしい爆撃を受けた国であり、現在でもそうである」と説明されている。「Per Capita」というのがCOPEの説明で度々紹介され、強調されているが、「ベトナム戦争当時人口300万人だったラオスに390万トンの爆弾が投下された。ひとりあたり1.3トンである」⁷⁾との事実を知れば、その理由も納得できよう。

アメリカによるラオスへの空爆任務は580000回にもものぼった。クラスター爆弾が最初に投下されたのもラオスであり、いまだに多くのクラスター爆弾の子爆弾（ボンビー Bombyとよばれている）が不発弾となり、市民の生命や身体へ危険をもたらしている。ビエンチャンに行けば、



写真3 COPEで放映されている動画から。2016年1月，飯島撮影。

6) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）3頁。

7) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）157頁。

手や足を失った人を目にする可能性があるかもしれないが、ボンビーのため、1975年以降、20000人の死傷者（COPEの説明）、「戦争終結から30年たった現在でも年間100人以上の人が死んでいく」⁸⁾。

(2) モン族について

ベトナム戦争とラオスを語るとき、「モン」の存在も決して看過されてはならないように思われる。

1961年に大統領となったジョン・F・ケネディは「特殊作戦」を開始した。つまり「米軍が直接戦うのではなく、軍事顧問団として戦闘に介入するというものである」⁹⁾。アメリカの兵士の犠牲を少なくするため、ベトナム人にはベトナム人を、インドシナ人にはインドシナ人を、アジア人にはアジア人を戦わせるという考え方にに基づき、アメリカはベトナム戦争を遂行した。アジア人をアジア人と戦わせるというアメリカのポリシーのもと、アメリカは多くの国へのベトナム戦争への参戦を求めた。「集団的自衛権」の名目で、韓国（5万人）、タイ（11586人）、フィリピン（2020人）、台湾（31人）が米軍支援のために派兵された。ベトナム戦争に関してあまり言及されることはないが、米兵の犠牲を少なくするため、アメリカは「モン特殊部隊（HSGU）」を組織して、「沖縄の基地から来たアメリカの白星隊がモンの人々を訓練した」¹⁰⁾。そしてCIAはモン特殊部隊を北ベトナムやパテート・ラオと戦闘させる。そしてモン族の戦闘の様子と結末については、以下の記述を紹介しよう。

「2001年5月25日。アーリントンのベトナム戦争戦死者（58,000人）の名前を刻んだ黒壁には、モン特殊部隊兵士の名前はない。国防総省は「モンの兵士の10パーセントが死んだ。彼らがいなかったら、27万人のアメリカ兵が死ぬことになっただろう」と述べた」¹¹⁾。

このように、モンはアメリカ兵の身代わりとされた。1975年4月30日のサイゴン陥落がベトナム戦争の終結とされることが多い。ただ、1975年4月30日以降も、「モン」の悲劇は終わることがなかった。「米軍が去り、おきざりにされたモンの兵士とその家族を待っていたのは共産側からの報復だった。本当の「モンの悲劇」はそこから始まったのである」¹²⁾。1975年5月、パテート・ラオは機関誌『カオサン・パテートラオ』で、「モンを根絶することが必要だ」と明言した¹³⁾。1975年5月、ビエンチャンから43キロ離れた国道13号の、リック川に架かる橋でパテート・

8) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）157頁。

9) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）3頁。

10) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）3頁。

11) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）148頁。

12) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）裏表紙の記述から。

13) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）49頁。

ラオ兵がモン特殊部隊を攻撃し、兵士と多くの家族が殺害された¹⁴⁾。1977年から78年にかけて、モンの聖山であるプー・ビア（ピア山）はベトナム軍の130ミリ砲弾がふりそそいだ¹⁵⁾。1981年12月、ビエンチャンから50キロ離れた国道13号沿いで、ベトナム軍はモン特殊部隊の掃討作戦を行った¹⁶⁾。「2004年の今も、ベトナム軍のモン掃討作戦は続いている」¹⁷⁾。

【5】ラオスにいったい何があるというんですか？

ここでふたたび、上村春樹氏の質問に戻ろう。「ラオスにいったい何があるというんですか？」という質問に対し、いろいろな回答がありうると思う。ただ、私の中では、「ベトナム戦争の教訓」が、一つの答えとなっている。繰り返しになるが、1975年4月30日、サイゴンが陥落することでベトナム戦争が終結したとされることが多いかもしれない。しかし、一人当たり最大の爆撃を受けた国であるラオスでは、4月30日以降も決して平和が訪れたわけではなかった。1975年8月22日、ビエンチャンが陥落する。翌23日にはタートルアン広場に約20万人の市民が集められた。その市民だが、「翌朝、その多くがメコン川を渡ってタイに逃亡した」¹⁸⁾。私がこの原稿の最初で、メコン川の写真を掲載したのは他でもない。写真では良くわからないかもしれないが、この自然豊かな、魅力あふれるメコン川、夜には川沿いに多くの市民が集まり、お酒を飲んだりナイトマーケットが開かれたり、18時から4000KIP（2016年1月のレートで約60円）でエアロビに参加できるメコン川周辺だが、多くの市民、僧侶が命からがらタイに逃げた歴史があることを紹介したかったからである。とりわけベトナム戦争とラオスとの関係では、「モン」の人々のことに思いをはせずにいられない。アメリカ人兵士の犠牲を少なくするための身代わりに北ベトナム軍やパテート・ラオと戦闘をさせられ、多くの死傷者が出たモン。しかし、アーリントンにある黒壁に名前が刻まれていなかったなど、アメリカ政府から忘れ去られたモンの人々。ベトナム戦争でアメリカが撤退したのち、徹底的な報復を受けてきたモンの人々。こうしたモンの人々の状況から、私たちは何を教訓として読み取るべきであろうか。モンの人々の状況は、戦争法ともいわれる「安保法制」が成立した現在、日本とアメリカとの関係でも重要な教訓を与えてくれるように思われる。アメリカの戦争でアメリカ兵の代わりに日本の自衛隊員が犠牲になり、そしてアメリカの交戦国から日本人が恨まれるような事態が起こらないようにするためにも、モンの人々の悲劇から私たちは学ぶべきことが多い。

【追記】元気で学生の指導に熱心であった小松先生が大学を退官されたのは、まことに寂しい限りだが、学生指導に極めて熱心であった、小松先生の姿勢に恥じることのないように学生に接す

14) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）40頁。

15) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）64頁。

16) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）60頁。

17) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）157頁。

18) 竹内正右『ラオスは戦場だった』（めこん、2004年）54頁。

「ラオス」から何を読み解くか

ることを絶えず忘れないようにすると同時に、小松先生の今後のご健康とご多幸を陰ながら祈念する。